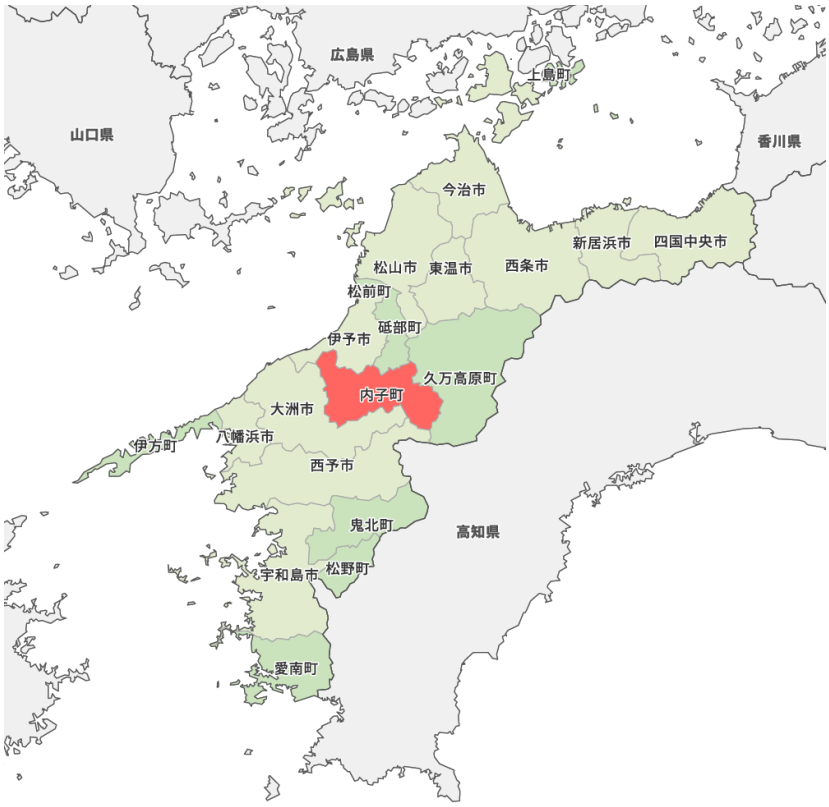
資料１ 内子町をとりまく環境

１．まちの概要

（1）地域概況

内子町は愛媛県のほぼ中央部に位置し、県都松山市からは約 40km の地点にあります。面積は 299.43 ㎢（国土地理院）で、その約８割を山林が占めており、町の中央部を一級河川・肱川の支流である小田川が流れる、緑と水に恵まれた自然豊かな中山間地域です。

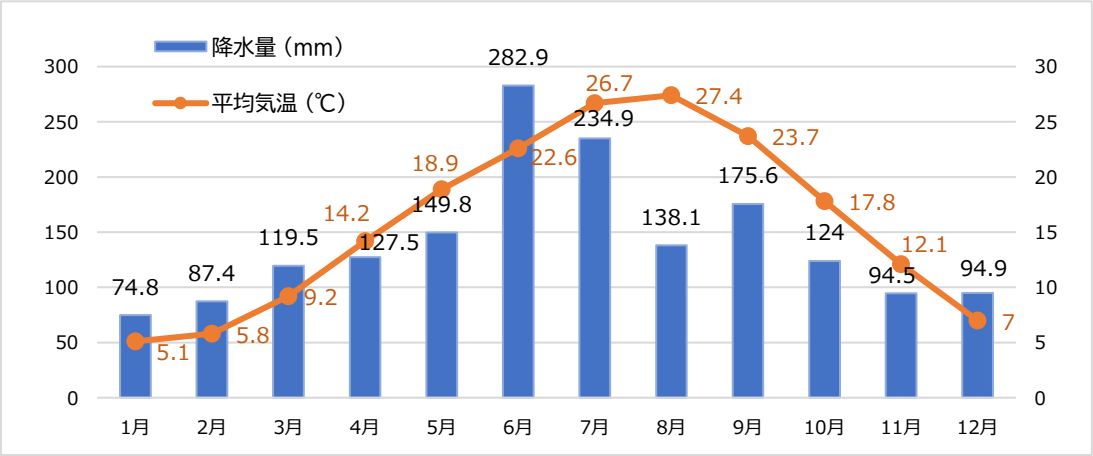
2005（平成 17）年 1 月 1 日に小田川流域の旧小田町・旧内子町・旧五十崎町が合併し、現在の内子町が誕生しました。町内には、江戸後期から明治時代にかけて製蠟業などで栄えた往時の面影を残す八日市・護国の町並み、棚田や屋根付き橋などの美しい里山の風景と営みが息づく村並み、小田川の源流を抱く小田深山をはじめとした緑深い山並みといった、誇るべきかけがえのない資源が数多く存在しており、合併以降、「町並み、村並み、山並みが美しい 持続的に発展するまち」を目指す将来像に掲げて、まちづくりに取り組んでいます。



【図 1】内子町の位置図［地図素材サイト･Map-It マップイット］

（2）気候概況

気候は、国有林野が広がる小田深山を除き、年間平均気温 15.6℃と温暖ですが、昼夜および季節毎の気温差が大きいのが特徴です。年間の平均降水量は 1648.8mm と比較的多く、盆地の特性から夏は高温多湿で、晩秋から初冬にかけてはしばしば朝霧が発生します。また、このような気象条件を生かして柿・ブドウ・梨・桃などの果樹やシイタケなどの農林産物が多く栽培されています。



【図 2】内子町の気温と降水量

［気象庁･HP 過去の気象データから作成(1991-2020 観測地点･大洲)］

（3）災害への懸念

内子町は、豊かな森林資源や水資源を有する一方で風水害による災害も多い地域です。

内子町国土強靭化地域計画（2025 年 3 月改訂）によると、国においては、水防法の規定により、新たに想定最大規模の降雨（小田川流域の 48 時間総雨量 811 ㎜）を対象とした浸水想定区域の指定が義務付けられました。内子町においても、過去に大雨や台風に伴う豪雨による浸水被害を受けており、小田川の洪水による浸水想定区域が指定されています。

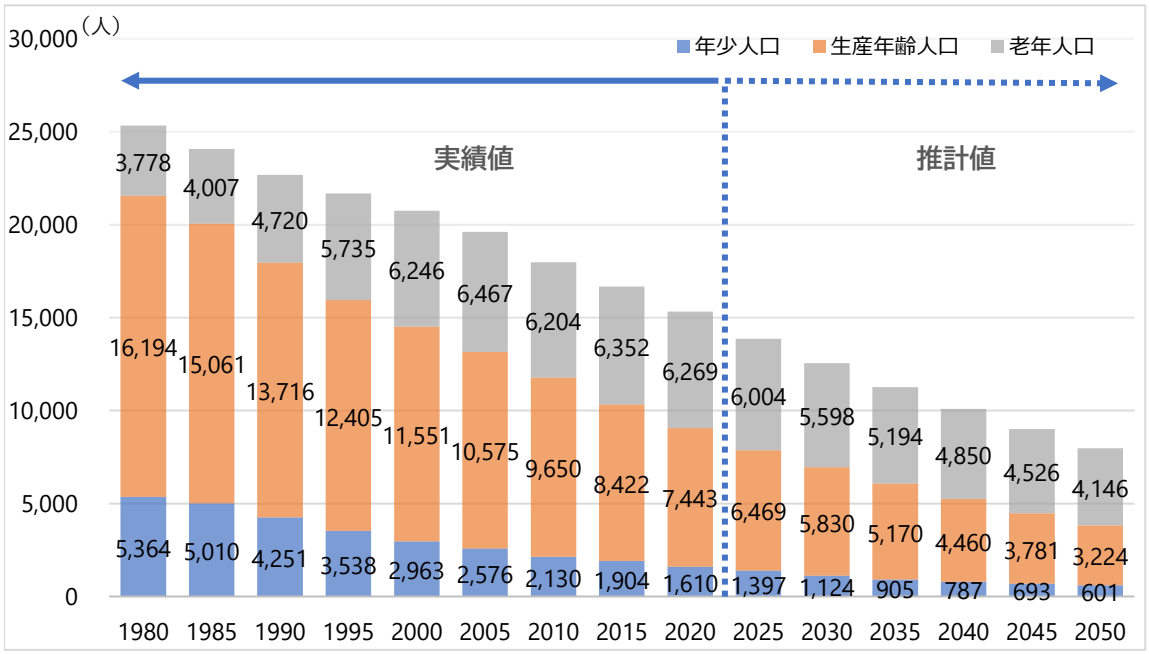
また地質上の特性や中山間地域に集落が点在している状況などから、町内の広範囲で土砂災害警戒区域および特別警戒区域が指定されています。

このような洪水や大規模な土砂災害を防止するためには、町面積の約 8 割を占める山林を適切に管理していくことが必要となります。一方で、所有者不明の山林の増加、人口減少や高齢化による担い手の不足等が大きな課題となっています。

南海トラフ地震については、2013 年（平成 25 年）に県が公表した地震被害想定調査において、想定される最大クラスの地震が発生した場合、内子町の被害は最悪のケースで死者は 84 人、全壊・焼失建物は約 1,800 棟にも上り、甚大な被害が発生すると予測されています。

（4）人口

2024（令和６）年４月１日現在の内子町の人口は 14,952 人、世帯数は 6,981 世帯となっています。人口は 1950 年に約４万人とピークを迎えましたが、以降は減少傾向が続いており、この 40 年間で約 40%減少しました。65 歳以上の人口割合を示す高齢化率は 41.9%で、全国（29.3%）および愛媛県（33.8%）に比べて大幅に高い状況です。国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口（令和５年推計）」によると、2045 年には内子町の人口は 9,000 人となり、町民の約２人に１人が高齢者になると予測されています。



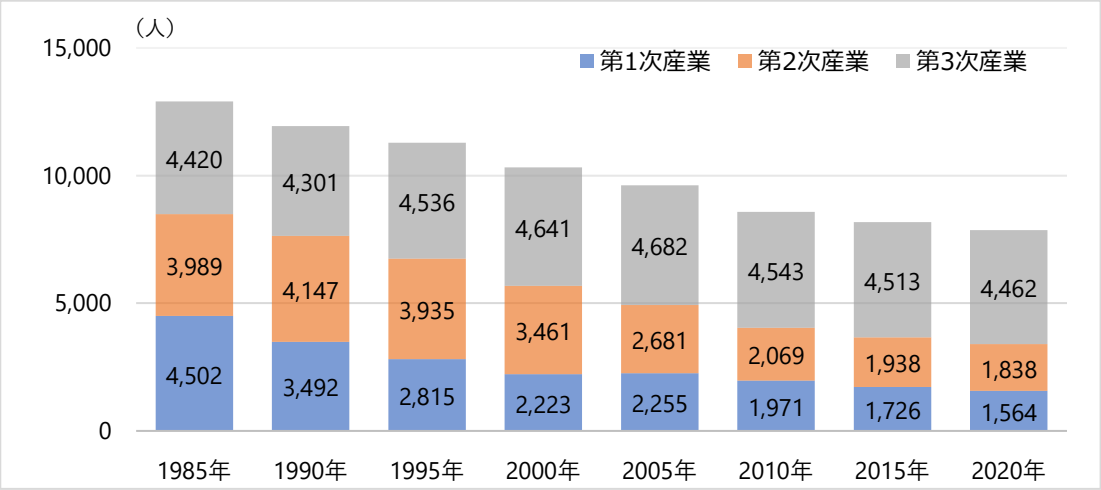
【図３】内子町の人口推移

［実績値/総務省･国勢調査、推計値/（国立社会保障･人口問題研究所　日本の地域別将来推計人口］

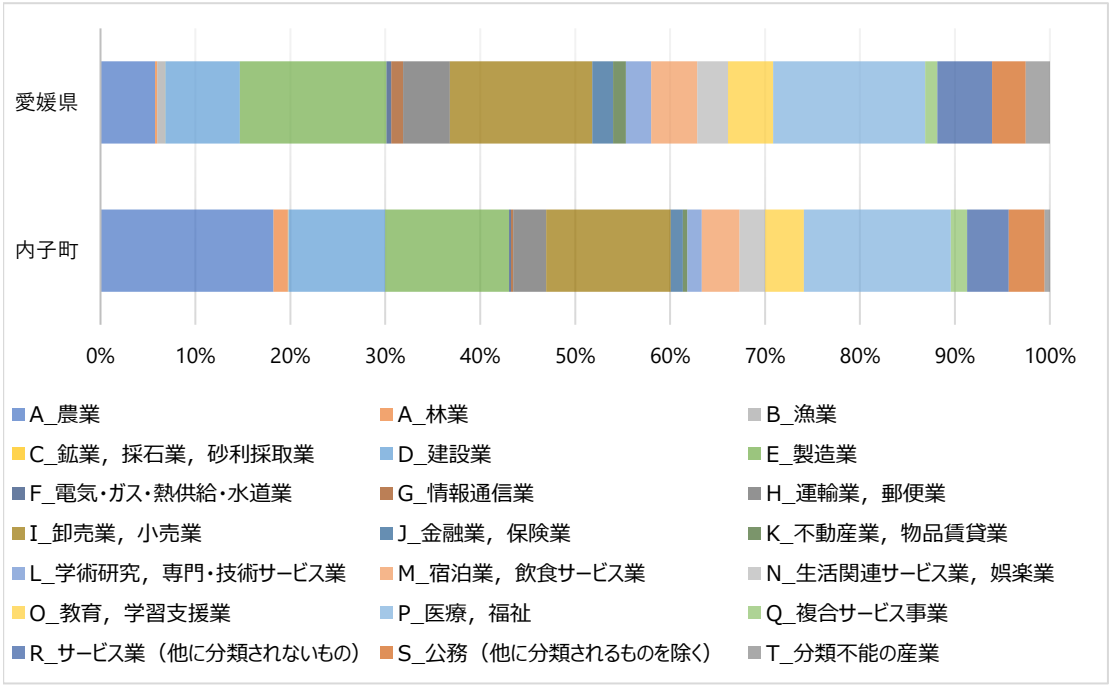
（5）産業構造

内子町の就業人口をみると、1985 年（昭和 60 年）以降、全体の就業者数は一貫して減少しており、特に第 1 次産業および第 2 次産業の就業者が急減しています。サービス業などの第 3 次産業は横ばい傾向です。

就業構成比では、愛媛県全体に比べて「農業・林業」の従事者が大幅に多く、約 20%を占めています。次いで「医療・福祉」が約 15%、「製造業」および「卸売業・小売業」がそれぞれ約 13%となっています。



【図 4】産業3区分別就業者数の推移［総務省･国勢調査］



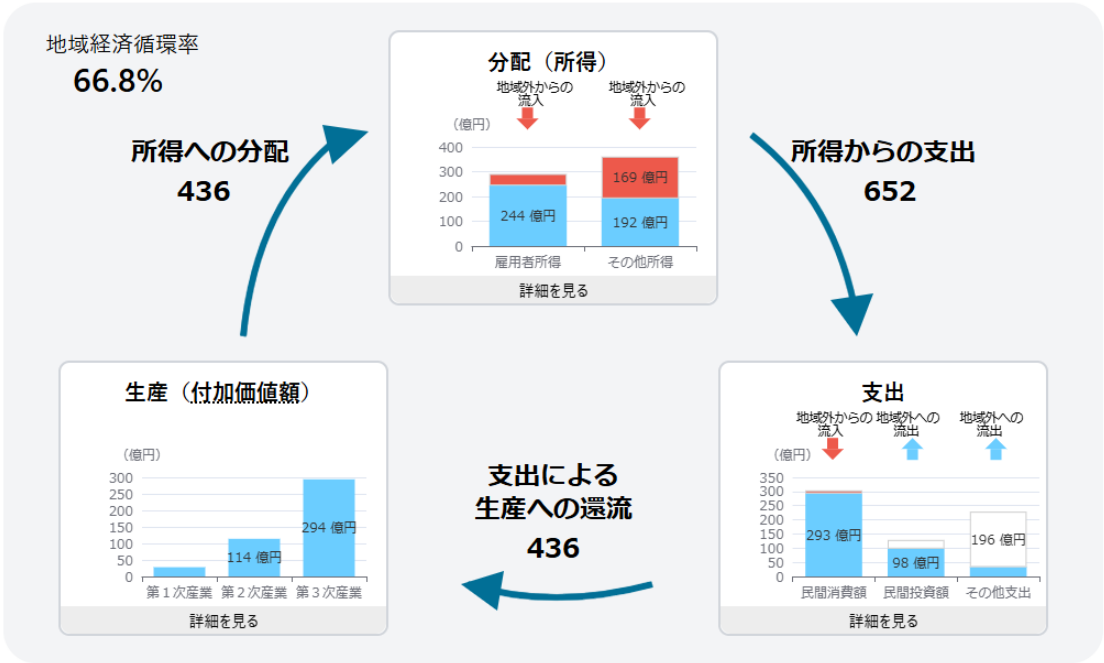
【図 5】愛媛県と内子町の就業構成比（2020 年）［総務省･国勢調査］

（6）地域経済の動き

地域内企業等の経済活動を通じて「生産」された付加価値は、労働者や企業の所得として「分配」され、消費や投資として「支出」されて、再び地域内企業等に還流します。このいずれかの過程で地域外にお金が流出した場合、地域経済が縮小する可能性があるため、地域経済の循環を把握し、どこに課題があるのかを分析する必要があります。

内子町における「生産（付加価値額）」は436億円、１人当たりの付加価値額（労働生産性）は608.0万円（全国平均957.2万円）となっています。「分配（所得）」では、地域外からの流入が216億円あり、33.1%を占めています。「支出」では、地域外からの流入11億円に対して地域外への流出が227億円、このうち25億円がエネルギー代金です。「生産（付加価値）」に占めるエネルギー収支の割合は△5.6%で、同規模の地域（人口１万人以上５万人未満）の平均である△3.3%よりも高くなっています。中でも「石油・石炭製品」「電気」の流出額が大きく、化石燃料からのエネルギー転換と電力の再エネ化によるエネルギーの地産地消をいかに進めていくかが課題です。

地域経済の自立度を示す地域経済循環率（値が低いほど他地域から流入する所得に対する依存度が高い）は 66.8%となっています。



【図 6】内子町の地域経済循環分析 ［内閣府・地域経済分析システム（RESAS）］

（7）交通

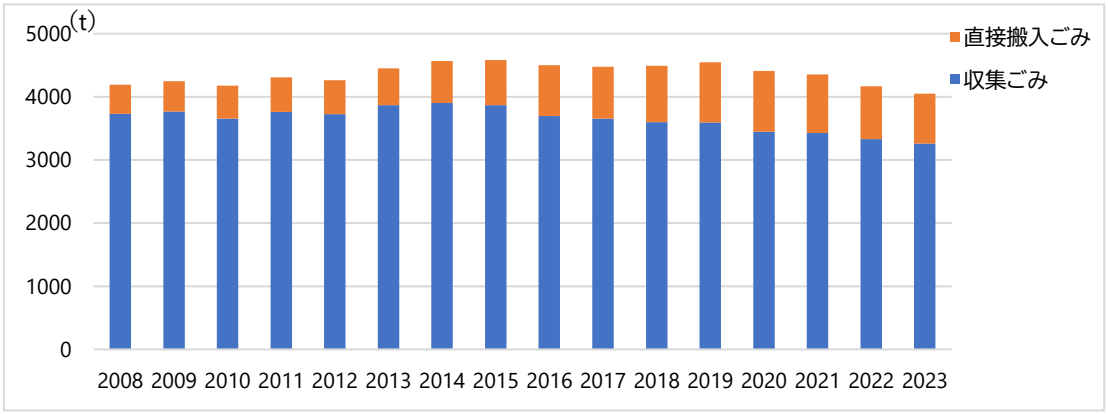
町内は、松山市方面と宇和島市方面を結ぶ国道 56 号と、小田川の本流・支流に沿って国道 379 号・380 号が走っています。また、国道 56 号と並行して松山自動車道が整備されており、松山 IC から内子・五十崎 IC までの移動時間は約 25 分です。

鉄道は、JR 予讃線（内子線）が通っており、伊予立川駅、内子駅、五十崎駅が立地しています。バス交通は、幹線道路を中心に町営バスが 1 路線運行されているほか、山間部と各地域の中心部を結ぶ町営デマンドバスが 19 路線運行されています。

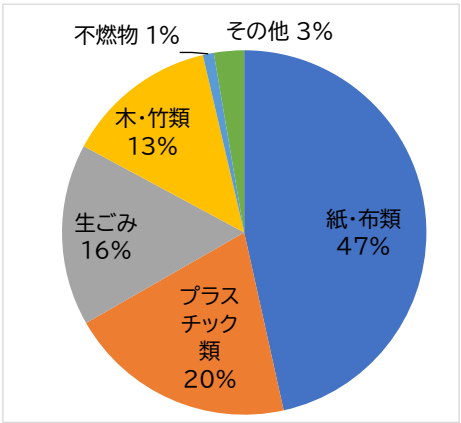
（8）廃棄物

内子町で 2023 年度（令和 5 年度）に排出されたごみの総量は 4,045 トン、町民 1 人 1 日当たりの家庭系ごみ排出量は 731 g でした。ごみの総量は、人口減少に伴って近年は減少傾向にあります。1 人 1 日あたりのごみ排出量は、2008 年の 597 g を最小値として、以降は増加傾向が続いていましたが、2022 年度（令和 4 年度）から減少に転じています。

可燃ごみの内訳をみると、紙・布類が 47%を占め、次いでプラスチック類 20%、生ごみ 16%となっています。資源ごみのリサイクル率は 17%で、ほぼ横ばいです。



【図 7】内子町のごみ排出量の推移［一般廃棄物処理実態調査資料］



【図 8】可燃ごみの内訳
［内子町･ごみ質分析（2023）］